

S1-3

半島部における地域再生の試み  
 地域・大学連携による高台移転と復興住宅の計画  
 A trial of the local revitalization in the peninsula area

The plan of the move to a higher elevation and revival residencies made by the local government (Ogatsu Cho, Ishinomaki) and the association of Universities

○佐藤光彦<sup>1</sup>、山中新太郎<sup>1</sup>

Mitsuhiko Sato<sup>1</sup>, Sintaro Yamanaka<sup>1</sup>

1. 半島部の被害

石巻市東部に位置する牡鹿半島や雄勝半島などの半島部は、美しいリアス式海岸の景観で知られ、沿岸部には数多くの小規模な漁村集落がある fig.1。東日本大震災ではこうした漁村集落が壊滅的な被害を受けた。雄勝地区では 20 集落のうち 15 集落が津波により甚大な被害を受け、約 250 名の死者・行方不明者があり、1,348 棟が全壊。総合支所や公民館、小中学校、公立病院など、エリア内の公共施設のほとんどが壊滅し、道路や港湾施設にも大きな被害があった [1]。



fig.1 雄勝半島、各浜の位置

2. 地域復興への課題

半島部ではこうした社会インフラの復旧とともに、高台移転による新たな居住地の造成が急務となっている。住民の多くは今なお仮設住宅での生活を余儀なくされており、地域外へ避難している住民も少なくない。避難生活の長期化や復興計画の遅れから、地域への帰還希望者が伸び悩んでいることも問題となっている。

こうした状況で地域に求められているのは、具体的な暮らしの未来を示す絵である。新しく住まう場所での生活のビジョンを示すことが地域復興への求心力を高め、帰還の動機付けになる。しかし、被災地にはこうしたビジョンを描く機能が不足し、計画の遅れに繋がっている。

3. 地域・大学連携による復興への取り組み

雄勝半島では、現在、東北大学、東京芸術大学、立命館大学、本学の 4 大学の建築系学科が連携して、各浜の復興計画ビジョンの作成に当たっている。半島部での計画作成の難しさは主に以下の 3 点である。

- ① 各集落の規模が小さく、分散していること
- ② 平坦な土地が極めて少ないこと
- ③ 幹線道路が少なく、アクセス可能な移転候補地が限定されること

各集落では、漁業などの生業をもとに相互扶助的なコミュニティが形成されており地縁意識が強く、集落の統廃合は困難であり、半島部では従前の集落ごとに高台移転が計画されている。それぞれの集落は世帯数や生業、地形や周辺環境などが異なり、その特性に応じたきめ細かな計画が必要である。そのためには集落ごとの特性を把握し、住民の生活様式を詳しく理解することが重要である。旧雄勝町は 2005 年に石巻市と合併したが、地域では市の出先機関である雄勝総合支所が住民サービスの窓口になっており、行政と住民の間に、いわゆる「顔の見える関係」が残っている。雄勝地区では、雄勝総合支所が中心になって大学と住民、土木コンサルタントらをつなぎ、集落ごとに復興計画を作るという作業が続けられている。

4. 残存住居・集落の調査

計画にあたり本年 3 月と 4 月の 2 回にわたって、総合支所の協力のもと、大学合同の残存住居・集落の調査を行った。調査では住宅や納屋や蔵などの付属施設、外構について、合計 26 棟の建物の実測と居住者へのヒアリング調査を雄勝半島の各所で行った。調査では「キバづくり」と呼ばれる fig.2 のような間取りの住居が共通して多く見られた。この住宅は縁側に面して茶

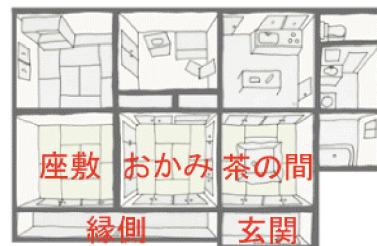


fig.2 伝統的な三間二列の住宅平面構成

1：日大理工・教員・建築

の間、おかみ、座敷が連続し、その背面に納戸や奥座敷などが並んでいる。玄関は茶の間に面しているが奥行きが少なく、茶の間の前室のような役割をしている。これらの住宅形式は草野和夫らによる東北民家史研究 [2] で示された桃生（ものう）地域の伝統的な住居形式の系譜の延長にあると考えられ、近年建て替えられた住宅でもキバづくりの間取りが概ね踏襲されていることが確認された。こうした調査結果から、3つの住宅案を作成した。

### 6. 名振、船越、波板の高台移転計画

現在、本学では6つの集落の高台移転計画を作成している。そのうち「名振」「船越」「波板」の3つの集落の計画について与条件と計画の要旨を示す table.1。

#### (1) 名振

高台移転地が2つに分かれ、それぞれ既存集落に隣接している。既存集落と連続するようなまちなみ景観の形成を主題に、各住戸からの海への眺望等を確保するように計画している。

#### (2) 船越

従来は海から内陸へ伸びる谷筋にあった集落が津波でほぼ全滅したために、近隣の山頂部に集落全体が移転される。従来からあった「通りを介した界索性」などを新しい土地で再生することを、計画の主題にしている。

#### (3) 波板

国道の海側にあった集落のほとんどが被害にあったため、国道の反対側（内陸側）のなだらかな丘陵地に新しい居住地が移転される。既存の樹木や傾斜、小川などの環境を取り込んで、親自然的な集落の形成を目論んでいる。

### 7. 小規模集落の地域再生モデルの構築へ向けて

上記の3つの集落をはじめとした半島部の小集落の高台移転の計画は、震災復興という直接的な目的に留まらず、全国の山村漁村集落の再生モデルになりえるものである。地方の小規模集落は、未だに地縁的な関係や習慣が残っている。各地域の自然環境や気候風土がそのまま住民の生業や生活とも直接結びついており、固有性を無視した一律の再生計画では地域性豊かな集落の再生はできない。一方で、何らかの標準化や方法の共有がなければ、再生コスト上、不合理である。こうした問題を、住民や行政、大学間で連携し、丁寧に計画を作成する必要がある。各集落の再生へ向けて、今後も技術的な支援をし、そこで得た知見を全国の地域再生へと繋げていけるように研究を進めていきたい。

#### 参考文献

- [1] 石巻市震災復興基本計画、石巻市、2011
- [2] 草野和夫：「東北民家史研究」、中央公論美術出版、1991

集落名	名振	船越	波板
移転戸数	約 35 世帯	約 45 世帯	約 12 世帯
生業	漁業(近海、養殖)	漁業(近海、養殖)	農業(畑作、果樹園)
移転候補地の立地特性	①移転地が東西2つに分かれる ②残存集落に隣接する ③海との距離が近い	①人の住んでいなかった山頂部へ集落全体を移転する ②海を見ることができない ③北西の風が強い	①緩やかな傾きの南斜面 ②残存集落とは高盛りされた国道で分断されている ③敷地内に特徴的な樹木と沢がある
計画方針の概要	a)残存集落と馴染むような宅地割り b)高低差を生かし雑壇状に造成 c)各戸で海へ抜ける視線を確保	a)約10戸ずつでクラスターを形成 b)外周、内周にループ状の道路を設定 c)道路へ生活感が現れるように住居を配置	a)既存樹木や沢を避けて宅地を選定 b)縁側の向きや隣棟間隔、視線の抜けなどを考慮して住棟や納屋を配置(住棟配置先行)
配置図			